

100年を超えた
知的探究心が
世界につながっていく

Das Kapital.

Kritik der politischen Oekonomie.

Von

Karl Marx.

Erster Band.

Buch I: Der Produktionsprocess des Kapitals.

Hamburg

Verlag von Otto Meissner.

1867.

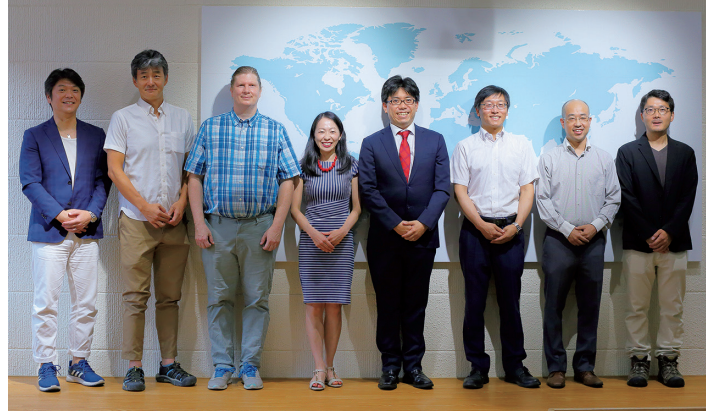
New-York: L. W. Schmidt, 24 Barclay-Street.

附属図書館には、経済学者であり、哲学者でもあったドイツ人カール・マルクスの『資本論』の自署献辞入りの初版が保管されている。1867年に出版されたもの。初代学長の故・大野純一博士が所蔵しており、1983年に遺贈された。知的探究心は今に引き継がれている

小樽から世界へ

地球規模の視野で学ぶ
グローバルコース

「実学」「語学」「品格」という教育理念をさらに推し進めていくのが、新設のグローバルコースだ。1学年20人の少数精鋭で世界を見据える。



グローバルコースで教壇に立つ教員たち。左から猪口純路教授、松本朋哉教授、クランキー ショーン教授、山川史准教授、池田真介教授、王力勇准教授、小林広治准教授、森谷亮太講師。学生たちは多くの科目を英語で学ぶと同時に、北海道の地場産業にも触れることで、「グローバル人材」と育っていく

前身の小樽高等商業学校の開学は1911年。創立110周年を迎えようとする2021年4月、小樽商科大学に新たな学びの場として立ち上がったのが「グローバルコース」だ。「グローバル」は「グローバル（地球規模）」と「ローカル（地域）」を結びつけた造語で、「グローバルな視野のもと地域の社会・経済・文化の発展に貢献する意欲のある人」という大学の「求める学生像」に準ずる。グローバル教育部門で副部門長を務める池田真介教授が話す。「15年に導入したグローバルマネジメント副専攻プログラムを主専攻に発展させたのがグローバルコースです。定員は20人で、1年生のうちから商学や経済も英語で学んでいきます」

入学者選抜には書類選考に加え、英語によるグループディスカッションが用意されている。この試験形式は、ビジネスシーンを含む国際社会では、自ら考える力や異なる意見を受け入れる姿勢が重要という方針による。**必須の海外研修は自己負担5万円**

グローバルコースには、日本では珍しい「ギャップイヤープログラム」が設けられている。入学を1年猶予し、ハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジで学ぶ制度だ。対象は5人以内で、グローバルコースの合格者から試験を経て選抜される。穴沢眞学長は言う。

1年次に約1カ月の海外研修プログラムへの参加が必須という点も特色だろう。費用の大半は、同大学の卒業生で、日本オラクル設立者の佐野力氏の寄付による「佐野力海外留学奨励金」でまかなわれ、自己負担はわずか5万円で済む。

池田教授は、早期留学が先につながる展開を期待している。「1年次の短期研修をきっかけに、2年次、3年次には積極的に交換留学を経験してほしい。語学と実学を生かし、卒業後は北海道の経済に貢献したり、世界的視野で活躍したりする人材を送り出していきたいです」

「小樽から世界を相手にする」。グローバルコースには小樽商大の情熱が凝縮されている。

3大学統合で文理融合の新たな展開

2022年4月、帯広畜産大学、北見工業大学と法人統合し、国立大学法人北海道国立大学機構が創設される。「実学の知の拠点」を新たに形成し、地域社会の発展に貢献することを目的とする。

「商学」「農学」「工学」の観点から、3大学が相互提供する文理融合科目が設けられる。小樽商大は「グローバルバリスムと地域経済」、帯広畜産大は「農学とテクノロジー」、北見工業大は「数理データサイエンス概論」などを提供する予定だ。小樽商大の穴沢眞学長が話す。

「文系理系の枠を超えた異分野融合の教育を進める点特徴です。異分野の交流によって新たな知見が生まれる可能性が高まりますし、その積み重ねが北海道の発展や人材育成につながっていくはず」



プラート カロラス教授(奥)はグローバル教育部門長を務める

Key Words

グローバルコースがよくわかるキーワード

ギャップイヤープログラム

大学入学前にハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジで語学やマーケティングなどの授業を選択履修し、振り返り学修後に小樽商大に入学。費用のうちの100万円は大学が補助する。

グローバルセミナー

グローバルなビジネス社会で通用する人材を育成するため、1年次から4年次までゼミ形式の「グローバルセミナー」を継続。学びを広げるため、2、3年次の交換留学が推奨されている。

二つのコース

2年次前期から、「経済学科ビジネス経済学コース」が「商学科グローバルマネジメントコース」のどちらかに所属。いずれも3、4年次にグローバルセミナーで研究論文を執筆する。

学生ベンチャーの挑戦

ゲストハウス運営で
小樽と世界をつなぐ

「実学」を教育理念の一つに掲げる大学らしく、学生ベンチャーが盛んだ。合同会社えんちやうはゲストハウスの運営を手がけている。



大学のほど近く、坂の上の住宅街にゲストハウス「HOST E L 順風満帆」がある。空き家を再利用したもので、猪口純路教授のゼミで学ぶ学生たちによる合同会社えんちやうが運営する。2021年度は21人の3年生、27人の4年生が関わる。会社自体は18年10月に創立された。「えんちやう」は大阪出身である猪口教授の口癖だ。猪口教授はこう話す。

「自分で考えて、やりたいと思ったら自分でやってみることを重視しています。今のうちにどんどん失敗して、それを社会に出てから生かしてほしいです」

自分たちのアイデアを社会に生かせる

19年3月にオープンした「順風満帆」のコンセプトは「地元とつながる」。特に外国人観光客をターゲットとしている。新型コロナウイルスの影響は小さくないが、お化け屋敷やワークショップスペースとして活用するなどアイデアをひねり出している。



合同会社えんちやうの学生たち。左から鳥本晴也さん、渡辺楽さん、當宮千聖さん、平田純華さん、丹代優生さん、谷口貴彦さん、竹内大和さん。當宮さん、平田さんは3年生、その他は4年生。全員が今の経験は社会人になって生きると感じている



CHALLENGE

小樽商大生のチャレンジ

新3年生が起業

2021年4月、市原啓善ゼミの3年生たちが株式会社Mercutious（マーキュリオス）を立ち上げた。会計の専門的な知識を生かし、金融商品開発事業を手がけていく。

合同会社PorRan

「商大生レンタル」という事業を展開。企業理念の一つは「商大生と小樽を繋ぎ、新しい価値を生み出す」で、祭りの手伝いなど小樽市民のニーズに応じて学生を派遣する。

北海道経済産業局長賞

21年3月、木村泰知ゼミが「北海道学生アプリコンテスト2021」で北海道経済産業局長賞を受賞。「商大生のための時間割」というウェブアプリが評価された。

坂村翼さんがグランプリ

「GAI RA Bレイイチ・チャレンジ2020」で受賞した。1枚の企画書でゲーム企画を競うもので、坂村さんは「ライメンは油たつぷり熱々が美味い」という遊びを提案した。

大賞や朝日新聞社賞を受賞

20年12月、近藤公彦ゼミと鈴木和宏ゼミの学生が、48チームが参加した「大学対抗健康×マーケティングコンペティション2020」で大賞、朝日新聞社賞などを受賞。

岡村翔さんが奨励賞

20年12月に実施された日本生態学会北海道地区大会で、「将来の館に込められた孵化直後のエンサンショウウオ幼生の表現型可塑性」を発表し、奨励賞を受賞した。



ゲストハウスの名前は「小樽市の繁栄」「会社の運営」「ゲストの旅」が順風満帆にいくように、という思いが込められている。旅行者と地元民の交流の場となることも目指している



アントレプレナーシップ専攻教授

猪口純路

いのぐち・じゅんじ／小樽商大出身。「順風満帆はゲストハウスにとどまらず、新たな価値を生み出す場所になってほしい」と話す。

やりがいは大きい。平田純華さんは「自分たちのアイデアを社会に生かせる」と話し、渡辺楽さんは「多くの人の意見を取り入れて何かを形にするのが楽しい」と語る。「会社員」としての自覚も強く、鳥本晴也さんは「当事者意識を持つと責任感が強まる」と言い、當宮千聖さんは「周りを信頼して仕事を分担することが大切」と述べる。

学生起業を後押しする体制はさらに強まる。22年度にはアントレプレナーシップ副専攻が新設される。猪口教授が言う。「留学にも力を入れていますが、うちほどチャンスがある大学はなかなかないと思います。『あれもこれもやりたい』という人は絶対に楽しめるはずですよ」



道外から運河の街へ

埼玉と京都から北海道西岸にきた4年生に、小樽商大だからこその得られたものを聞いた。

埼玉県から
来ました



Students
01 商学部商学科4年
栗原 謙さん

私の
好きな
場所



3号館のグローバルラウンジは自由に使えるスペース。「夜遅くまで友達と勉強し合ったこともあります」

小樽を行き来する際の電車で 目に飛び込む海の景色がお気に入り

埼玉県からやってきた下宿生活の初日、先輩たちが歓迎会を開いてくれました。口調が優しく、穏やかな雰囲気、すぐに北海道の居心地の良さが気に入りました。

下宿に加え、商学科、ゼミ、バスケットボールのサークルと、いろいろな場所でできた友達は大きな財産です。単科大学というごちゃ混ぜとした環境だからこそ濃密な人間関係を築くことができ、一生付き合える友達をたくさんつくれたのだと実感しています。

入学を後押しした要素の一つは就職率の高さでした。自分で大学生活を送るなかで、その理由がわ

かりました。マーケティングや貿易、金融に加え、必修の英語や第2外国語として選択した中国語など、多方面の学びができ、こうした教養の幅広さが社会では価値あるものとみなされるのだと思います。実際、卒業生の就職先の業種は多岐にわたっています。「何を学びたいか」がまだ曖昧な受験生でも、豊富な学修環境が整う小樽商大なら何かしら夢中になれるものが見つかるはずですよ。

入学当初から波長が合ったこともあり北海道で就職します。濃厚だった4年間を生き、社会に貢献できる働き方をしたいです。

学生の主体性を重視する校風が好き 今は日本民俗学に傾倒

国公立の大学という選択肢のなか、小樽商大に決めました。昔から「北の外国語学校」と呼ばれているとおり、英語、ドイツ語、フランス語、中国語などの7カ国語から2カ国語を学ぶのが基本です。僕自身は英語とロシア語を選択しました。留学制度も充実していて、周りの友達も留学を経験して国際的な感覚を磨いていました。

小樽商大の学則には「広い視野と深い専門的知識及び豊かな教養」という言葉があり、僕自身も興味のあることには積極的に手をのばす習慣ができました。アイヌ民族や源氏物語を含む古典文学、

あるいは化学の基礎など、関心を引かれる事柄に関しては、時間を分けて本を読みあさっています。

今、一番魅力を感じているのは日本民俗学です。柳田國男さんの『遠野物語』が愛読書で、実際に岩手県の遠野地方に足を運び、ワーキングホリデーの制度を利用して、2カ月ほどのフィールドワークを行っている真っ最中です。

「やりたいこと」に出会えたのは幅広く知識欲を刺激する小樽商大の環境のおかげだと思っています。京都から北海道に来て過ごした時間が自分自身を成長させてくれたのは間違いありません。

京都府出身
です



Students
02 商学部経済学科4年
岡部 亮大さん

私の
好きな
場所



2号館から見える景色がお気に入り。「観光名所の旭展望台に負けないくらい、小樽の街と海がきれいに見えます」



卒業生の視点

「実学実践」を教育の柱に据え、主体的な学修を重視する学び舎を巣立った先輩が見る母校の魅力とは。



Alumni
02 赤松 蒼生さん
ダイキン油機エンジニアリング株式会社
2020年度 経済学科卒／大阪府出身

小樽の街の活性化に
夢中になった大学生活

「小樽は第二の故郷です」と言い、「青春がぎゅっと詰まった場所なので」と笑みを浮かべる。青春の一つは、座学で学んだ知識や理論を生かし、グループで街おこしを行う「本気プロ」という実学科目だ。3年生のとき、3人のチームで、小樽の街を自転車ですりぬぐったサイクリングマップを製作した。「レンタサイクル店に依頼して自転車に位置情報がわかるGPSをつけました。そのデータからどんなルートが人気かを把握し、訪れてほしい飲食店や観光スポットを地図に落とし込みました。自転車観光船に乗せる海ルートもつくりました」

ゼミ形式のNPO法人Egaoでも、街づくり支援に参加。地元根差した活動を行う団体で、自身は地域通貨のプロジェクトに励んだ。「発行までには至りませんでした。が、飲食店に募金箱を置かせてもらったり、小樽商大の図書館の処分本をECサイトで販売したり、資金集めに奔走したのはいい経験でした」小樽商大の魅力について話すと、舌が滑らかになった。

ゼミ活動の一環で
故郷の関西へ



3、4年次のゼミ活動は自分を大きく成長させてくれたと思います。特に3年次に合同ゼミのために関西遠征を行ったことは忘れられない思い出で、仲間たちとの絆が深まったイベントだったと感じています



Alumni
01 野村つかささん
トヨタ自動車株式会社
2020年度 商学科卒／北海道出身

英語力に磨きをかけ
グローバル企業に就職

入学の決め手となったのは充実した留学制度だった。「高校生のときに自己負担5万円で留学できると知り、絶対にこのプログラムを利用しようと思ったんです」「5万円留学」を支えるのは「佐野力海外留学奨励金」だ。大学の卒業生の寄付による支援を受け、アルバイトで5万円をためて1年次にニュージーランドに留学。ホストファミリーの家にホームステイし、1カ月ほど現地の語学学校に通った。

「初めての海外でしたし、正直、留学前は英語がほとんどできなかったんです。でも、現地では旅行もできなし、『やればなんとかなる』という強さが身についたと思います」前向きに挑戦する姿勢はさらに強まり、3年次には大学を1年間休学しアメリカへ渡った。世界的に有名なリゾートパークで働きながら英語力を磨き、国際的な視野も広がった。就職してすぐ、小樽商大でのアクティブラーニングやグループワークの効果を実感したという。

ニュージーランドが
人生初の海外経験



ホストマザー(右)は育児のかたわら、毎日親身になってくれました。最初から最後まで家族の一員として接してくれたことに感謝しています。ホストファミリーのおかげで、英語をより勉強するようになりました